

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

学部研究科等番号・名称：6 理学部・理学研究科

申立ての内容	申立てへの対応
<p>【評価項目】 I 研究水準 2. 研究成果の状況</p> <p>【原文】 [判定] <u>期待される水準を上回る</u> [判断理由] <u>「上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16 ～19 年度の評価結果（判定）を変えようような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。」</u></p> <p>【申立内容】 【修正文案】の通り変更願いたい</p> <p>【修正文案】 [判定] <u>期待される水準を大きく上回る</u> [判断理由] <u>「研究成果の状況」については、各専攻において平成 20 ～ 21 年度に優れた業績を挙げており、特に益川・小林両氏による CP 対称性の破れに関する理論研究に続き、実証実験の提唱、実証実験の実施（高エネルギー加速器研究機構）があった結果、両氏に 2008 年（平成 20 年）ノーベル物理学賞が授与された。これらを勘案し、平成 16 ～ 21 年度期間の研究の成果に関し「期待される水準を大きく上回る」と判断する。」</u></p> <p>【理由】 ノーベル物理学賞授賞が最も象徴的な出来事であるが、それに至る 3 つのプロセス</p>	<p>【対応】 原案のとおりとする。</p> <p>【理由】 現況分析における顕著な変化についての説明書及び研究業績の内容では、平成20、21年度において、判定を変えようような成果が上がったとは認められないため。</p>

が重要である。CP 対称性の破れに関する理論構築に続き、その実験的実証に向けて名古屋大学の研究者が実験を提案した。そして、名古屋大学の実験グループがリードした B ファクトリーの実証実験で、第 1 期中期計画期間後半までかけてデータが継続的に蓄積され、小林・益川理論を高い精度で支持する結果を得た。このデータによる理論の実証が 2008 年のノーベル賞授賞の決定打になった。このように、当研究科関係者による 3 つの研究成果（当初論文、実証実験の提唱、実証実験の実施）が統合された結果、中期計画期間中の平成 20 年にノーベル賞受賞が実現したと自己評価している。

なお、原文における「判断理由」の記載内容には、前述の事項が評価対象として考慮されたかどうかの具体的な説明がないため、大学は事実誤認の有無を確認することが不可能であった。大学が具体的な理由を確認し今後の教育研究活動の参考とすることができるよう、具体的な理由が明らかにされることを希望する。